

【文学と人生】

「言葉の最も純粹なる意味における美と自由の認識」などという当時口ずさんだ李太郎の一句が浮かんでいて懐かしく思うことがある」と丸木政臣は書いています。文学や哲学書を読みこみ、それが生活の中に生き続け、また読むだけでなく詠んで、膨大な短歌をつくりました。著作にも、丸木の心の中に住んでいる様々な個人が登場して、論文であつても挽歌の文学に読めます。

どういう短歌をつくるのか、どういう文学を書くのか。この根本には、日本でどう生きていくのかという近代の苦悩があります。木下李太郎は本名・太田正雄（二八八五～一九四五年）。冒頭の「一句」は詩ではなく、李太郎が「森鷗外の文学」（一九四五年）で、鷗外が真のヨーロッパ文明をこう把握していたとする一文。李太郎も鷗外も、日本にはない「フオルシユング (Forschung)」を学ぶべきとしつつも、ヨーロッパ文明を、また江戸文化もよしとせず、ともに

生活教育 キーワード

異国情緒として想像の世界に置きながら、「洋才」でも「和魂」でもない日本の文学、社会のあり方、人間の生き方を、自分で詩、文学を創作するなかで探究しました。

この模索は、「洋才」も「和魂」も戦争につきずすんでいく現実の中で行われ、丸木も親友や知人が死んでいく、殺されていく中での読書と思索でした。

李太郎は、医学者として、癩病は治る病気だと主張して隔離政策に反対しました。出身の獨協中学校は、今夏の日生連埼玉集会の会場・獨協大学と同じ獨逸学協会学校系列でした。

（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ① 丸木政臣『教師とはなにか』（丸木政臣教育著作選集第一巻 教師・教育論）澤田出版、二〇〇七年所収、原本一九七五年。特に二三三ページ。
- ② 成田稔『ユマーニテの人 木下李太郎とハンセン病』日本医事新報社、二〇〇四年。特に三五五ページ。